



間違い電話

9月8日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

9月8日のおはなし「間違い電話」

それは 一本の間違い電話から始まった。その男は真夜中に電話をしてきて、なれなれしくしゃべり続けた。あまり堂々としているものだから、間違い電話だと気づかなかった。てっきり知り合いからの電話だと思ってしまったのだ。こちらが相手の名前を失念しているのだと責任すら感じていたほどだ。会話の内容はとりとめないものだったが、主に感謝の言葉だった。「この間はどうもありがとう。あれで本当に助かったよ」繰り返し男はそう言った。

我慢できずに「ごめん。名前がどうしても思い出せないんだ」とどうとう口にする、特に気を悪くするでもなくからっと笑って「えっ、そうなの？ 面白いから次に会うときのお楽しみってことで」と流され、結局正体の分からないままその電話は終わってしまった。それがやはり知り合いからの電話ではなかったと確信するまでにはずいぶん時間がかかった。結局「次に会うとき」が訪れなかったため、何カ月も経ってから、やはりあれは間違い電話だったんだなと思うことになった。

でもそう確信するまでには、相手が知り合いだというのを前提にいろいろ考えさせられた。あんなに繰り返し感謝されるようなことって何だろう？ 自分は誰に何をしたんだろう？ あいつに金を貸したことだろうか？ いや、あれは貸さない方が親切だったかも知れないな。前の会社の同僚にはちょっとしたアドバイスをしたけどそんなに感謝されるようなこととも思えないし。そういえばいつだったか、後輩に頼られた時、もうちょっと何とかしていれば感謝されたかも知れないが、あの時は実際には何もしてやれなかったし……。

ぼくは何度も考えることになった。自分は感謝されるような何をしただろうか。あるいは感謝されるためにはどうすべきだったんだろうか。考えれば考える程、自分は誰かの感謝には値しないことを思い知らされた。そして「次に機会があったらせめてこのくらいのはしたい」などと思いめぐらした。間違い電話をきっかけに、ぼくは少しだけ変わったような気がする。少し人に親切になり、時には厳しく接することもできるようになった。いい加減な態度を取らないようにほんの少し気を配るようになったからだ。

それが学生のころの話だ。

間違い電話をかけるようになったのは、30代も半ばを過ぎてからのことだった。ある晩、酔っぱらって帰ってきて、それでも翌朝までに片づきたいことがあって書類を整理している時に、ある電話番号のメモを見つけたのがきっかけだった。それは文庫本にかぶせたカバーの端のメモ書きで、何の説明もなく、ただ番号だけが記されていた。人名もない、会社名もない、何の手がかりもない。その番号を見つめているうちにむくむくとその正体を知りたくなり、つい電話をかけてしまったのだ。

「もしもし」

出たのは女性だった。誰かはわからない。

「あっ。寝てた？」つながった瞬間、不意に大昔の一本の間違い電話の記憶が甦り、あの時のあの男のセリフが口をついてでた。「ヘンな時間にごめんね」

「えっ」

「いまちょっとだけいい？」

「あ。はい」

「いろいろ考えているうちに、ひとことだけお礼を言わなきゃって思いついて」

「お礼」

「このあいだのこと、ほんとありがとうね。あれで本当に助かったよ」

「このあいだのこと？」

「あ、いいんだいいんだ。そうだよ。覚えてないかもね。ただ、ぼくはとても助かったんだ。本当にありがとう」

「……カズト君？」

..... ー . . .
それはぼくの名前ではない。でもカズトという知り合いはある。そしてカズトと共通の知り合いとなると。その番号の持ち主が誰か、わかってしまった。そうなるこの演技を続けるのはむずかしそうだ。そろそろ切り上げ時だろう。

「あ。わかってないんだ。でも面白いから次に会うときのお楽しみにしておこう。とにかく本当にありがとう」

「え。ちょっと」

「ふふふ。じゃあまた。次に会うときに。遅い時間にごめんね」

わざといたずらっぽく笑って電話を切る。

こうして間違い電話が始まった。間違えてかけてしまう電話ではなく、かけようとおもってかける間違い電話だ。最初のうちはわからなくなった電話番号のメモをたよりにかけていたが、直に純粋な間違い電話をかけるようになった。月にだいたい1回のペースで。ほとんどの電話はせいぜい2、3分のうちに終わったが、中には話が弾んで長電話になることもあった。でもとにかく感謝の気持ちを伝えることだけに専念し、電話を終えるようにした。その人が電話のあと、「そこまで感謝されるようなこととは何だろう？」と思い返すことこそが肝心だからだ。

そして思う。いつかぼくはあの電話をかけるのではないかと。時間を越えて大学生の自分自身に。そう。あの電話の主の正体はぼく自身ではなかったかと夢想するのだ。もちろんそれが現実離れた考えであることはよくわかりつつ。

(「間違い電話」 ordered by はかせ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

間違い電話

<http://p.booklog.jp/book/33590>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33590>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33590>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.